

Anthony Glyn :
*The Blood of a
Britishman*

宮 下 忠 二

この本は最近出色のイギリス人論である。

ここ数年来、外国人による日本および日本人論がいくつも出版された。外国人が日本をどう見るかに、われわれは深い関心を持っているらしい。イギリスでもイギリスおよびイギリス人論（イギリス人自身が書いたものも多い）が盛んに出版される。われわれが外国人の日本論を気にする原因の一つは、この島国に長い間孤立して住み、次第に混血を嫌う、同質の、一家族のような民族集団をつくり上げてきたために、外国人に対して自分たちの生活の伝統に強い自信を持ちえないところにあると思う。ところがイギリス人の場合は、むしろ彼らの生活の伝統（それも日本のそれよりはるかに短いのだが）に自信があるために、イギリス人自身が自らを論じるときは、他民族に対する優越感に満ちているし、また外国人が書いたものに対しては、象が自らを撫でる群盲の話に興じる、というところが、少なくとも従来はあった。前者の中では W. R. Inge: *England* (1926) や H. W. Nevinson: *The English* (1928) や Arthur Bryant: *The National Character* (1934) などが名著として今日まで読みつがれ、後者の中ではチェコの劇作家 Karel Čapek の *Letters from England* (1925) やハンガリー出身の（後イギリスに帰化した）George Mikes の *How to Be an Alien* (1946) や J. H. Huizinga の

Confessions of a European in England などがすぐれた本であった。

だが最近、そのイギリス人の自信もだいたいゆるんできた。もちろん鋭敏なイギリス人の中には、すでに19世紀の末には、国力においてドイツやアメリカに追い越されたことを自覚していた者もいたが、一般の保守的なイギリス人たちが、大英帝国の没落をはっきりと意識したのは、第2次大戦後、それも厳密に言えば、ナセルがスエズ運河をイギリスから奪還した1956年以後のことであった。

そしてその意識が、政治や経済に関する書物ばかりでなく、イギリス国民性を論じた本にも反映してきたのは当然である。今イギリスで、気鋭な中堅詩人として認められている Harry Guest 氏が、数年前に半年ばかり一橋大学で英語を教えたことがあった。彼は前任者のあとを引きついで Nevinson の前述の本を教えたのだが、ある時、「どうもこの本を教えるのは照れくさくてね」と言って、困惑した表情を浮かべていたのを思い出すのである。Nevinson の本には、“the English gentleman.” を論じた一章があって、“self-control” だとか “Fair Play” の精神だとか、イギリス紳士の特性が列挙されている。Gentleman などとはもはや、街角の男性用公衆便所の入口の表示にしか存在しない、と皮肉を言われる時代になったのだから、Guest 氏が当惑するのは無理もなかった。おそらく今日のイギリスの正しい姿を紹介する必要を感じたのであろう、彼は *Another Island Country* (1970, 英光社) を日本の学生のために書き残してイギリスに帰った。この本には「イギリス紳士」という言葉は一度も出てこない。気負いのない、すこぶる平常な眼が見た、今日のイギリスの姿が紹介されている。

今日のような時代には、「イギリス人とは何か」という問は、以前にもまして重要な意味

を含んでいる。かつての広大な植民地を失い、政治的にも経済的にも次第に衰退した民族の、人間としての真価が今まさに問われているからである。現首相 Edward Heath 氏は1969年にこういう発言をしたことがある。“Britain may not be a super-power compared with America or Russia, but we offer the rest of the world an example of achievement through the character of the British people.”と。羨ましいばかりの自信である。しかし、イギリス人ほど誤解されやすい民族はあまりいないかもしれない。冷淡、偽善者、巧利主義者、美への不感症、といったレッテルを貼られるかと思えば、親切、寛容、フェア・プレイの精神などを讃える旅行者もある。au-pair girls というものがある。‘au pair’はフランス語で「相互の労力提供による」という意味を含むらしいが、本来はイギリスの中流家庭の娘が、ヨーロッパ大陸の、たとえばフランスの中流家庭に住み込み、いくらか家事の手伝いをして、その代りその家族の一員としてフランス語やフランスの風習を学ぶ機会を与えられる。そして逆にそのフランスの家庭の娘がイギリスのその家庭に住み込んで英語その他を身につける、といった仕組みである。主としてヨーロッパ諸国の間で戦前に広まったのが、最近ではヨーロッパのみならずアメリカや日本からも多数の au-pair girls がイギリスに集まってきている。理由の一つは明らかに国際語としての英語の比重が増大したことにあろう。現在イギリスには14カ国から約3万人の au-pair girls が滞在しているという。そして彼女たちを受け入れる家庭の方も、人手不足ということもあって、彼女らを女中代りに酷使するむきも多いらしい。

彼女たちは何ととってもイギリスの中流家庭に住み込んでいるのだから、それらの家庭

の内情をよく知っているはずである。そこで彼女たちをいく人が集めてイギリス人を批評させた本がある。Elaine Grand: *You British, as the au-pair girls see us* (1970, Weidenfeld and Nicolson) がそれである。警察官の親切さやロンドンの公園ののびやかさ、美しさをほめている者もいるが、だいたいは悪口で、よくもこれだけイギリス人のアラ探しをしたと思うほど辛辣な本だといっていい。イギリスの主婦の料理のまずさについて、“English women’s idea of a salad is a piece of dead lettuce, a bit of mashed up beetroot and half a rotten tomato.” だとか、その偽善について、もしイギリス人が “You must drop in and see us some day” と言ったら、それは「けっして私どもを訪問して下さいませな」という意味だとか、等々である。

この本を一読して私などに納得のいかない批判が多いのは、彼女たちが20歳前後の、敏感ではあるが移り気な少女たちであること、女中代りに酷使されているという憤懣を抱いている者が多い、などの理由によるであろうが、何ととっても「大人の国」イギリスのよさがこの娘たちにはまだ解らないというのが大きな理由であろう。偽善はよいことではないだろうが、時には人間の関係を潤すこともある。ただ偽善にもルールがあって、そのルールを知らぬ者はとまどう、ということであろう。

前置きが長くなったが、そういう意味でのイギリス人の複雑さ、その性格の奥行きの高さについて、その歴史的、心理的要因を解きほぐして説明しつくしているのが、Glyn の *The Blood of a Britishman* である。

この本の叙述は一見軽いタッチである。‘Pudding and Pies’(第6章)とか‘The Drinking Man and his Image’(第7章)とか‘A

Nice Cup of Tea' (第8章)などの章の題名からも察せられるように、イギリス人の日常の食べ物や飲み物に対する態度の中に現われる彼らの性格を、いかにも洒落た筆致で描いてみせる。「イギリス人は猫と同じで、物を食べている姿を見られたくないのだ」(p. 51)という言葉があるかと思えば、彼らの好むお茶について、茶そのものと同じくらい、茶のいれ方が大切で、「湯が沸騰したらそのヤカンをティー・ポットのところへ持って行ってはならぬ。ティー・ポットをヤカンのところへ運ばねばならぬ」という。イギリス人の性生活の特徴をヨーロッパ大陸の諸民族と比較した 'And So to Bed' (第12章)もある。

その他、スポーツや庭づくりを楽しむ彼らの姿や、自由に外国へ出かけて、こだわりなくそこに住みつく放浪癖 (Wanderlust) なども、それぞれ一章を設けて論じているが、読み進むにつれて、一見軽い見せかけにもかかわらず、これが容易ならぬ深みを持った本であることにわれわれは気がつく。たとえば第一・二章で大きっぱにイギリス民族の成立にふれたあと、第三章 'The Cult of the Loser' でいきなりイギリス国民性の核心に入る。これは「敗者礼讃」とでも訳すべきか、彼らの性格の中には根強く「判官びいき」の気持があるというのである。南極探険の Scott はその悲壮な最後のゆえに、エヴェレスト登頂隊よりも長く記憶されるだろうし、第2次大戦を通じてイギリス人の記憶に鮮かに残っているのは、あの壊滅的打撃をこうむったダンケルクの撤退だという。毎年11月5日は Guy Fawkes' Day で、イギリス中の子供たちが火花をあげて楽しむ。これは1605年カトリック教徒の Guy Fawkes が、国王と国会議員を爆破しようとして失敗した日だが、失敗して処刑された点にイギリス人の同情が集まって今でも記念されるのだという。この

敗者礼讃の精神は、たしかにイギリス人の modesty というのか、人中で目立たぬようにしている性格と深く結びついていると思われる。この一章で、著者が従来のイギリス人の優越意識をみごとに脱却していることが解る。ついでながら、わが国には「判官びいき」という言葉はあっても、一般の国民性としては、むしろ「巨人・大鵬・卵焼き」の好きな、事大主義的な面が多分にあると考えられるが、どうであろうか。

au-pair の少女たちがとくに不満に思っているらしいイギリス人の冷淡さについても、その由来するところが何章かにわたって追求されている。イギリスの学校教育の基本をなしている、public school の制度は、大人と子供を厳然と区別し、厳しい躰を受けていない子供はけっして大人になれぬ、という考えに支えられてきた。こういう教育観、ひいては人間観が、独立心の強い個人を育てる反面、結局は親子の関係を冷淡なものにしてゆき、それが悪くすると夫婦の間をも冷たくするのだ、という鋭い指摘がある。10年も20年もおたがいに一言も口をきかぬ夫婦がいるのだそうである (p. 133)。そしてその人間同志の情緒の欠如が、動物への深い愛情の源泉になっていることも指摘されている。

この本を読んでゆくうちに、イギリス特有のクラブでも、ユーモアの感覚でも、あるいはミニスカートでも長髪族でも、それらがけっして矛盾することなくイギリス人という歴史的存在の中に共存しうることが、いつの間にか納得させられる。その説得力は、著者の知識が、石器時代から1970年へ、またイングランドのみならずスコットランドやウェールズ、アイルランドの僻地にまで及んでいること、いくつかの外国にも長く住んで cosmopolitan の眼を持っている、などのためであろう。イギリス人は大学教育などを今でも重

要だと考えないとか、知識人 (intellectual elite) の言論を信用しない (p. 112) とかいう観察は、イギリス人というものがいぜんとして容易ならざる民族だと考えさせずにはおかない。最後に、イギリスの最も新しい現象への、著者のコメントを紹介しておこう。

「今日のミニスカート、長髪、賭事の流行は、軽薄であり無責任であり、かつての大国民の墮落ここにきわまったという印象を外国人に与えている。しかしこれらは、じつは、現在と未来を憂える人びとのかぶった、いわば道化の仮面ではあるまいか。……イギリス

人は泣くことをしない、後悔や心配で胸を叩いたり、未来に関して気高い信条を述べることもしないのだ (p. 166)。」

Sir Anthony Glyn は1922年の生まれ、名家の出であり Eton 校を出たあと大学へは行かず、軍人、工員、ジャーナリストなどいろいろな職業を転々とし、今までに伝記 *Elinor Glyn* (1955), *The Seine* (1966) など7冊の著作がある。

Anthony Glyn: *The Blood of a Britishman*. Hutchinson, 1970. 328 pp.